



Title	趣旨説明
Author(s)	崔, 範洵
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 11-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

趣旨説明

崔 範 洵

原爆の問題は、日本、それも広島・長崎に限定された問題として、認識される傾向があります。さらに、日本の植民地支配を受けていた韓国・台湾、そして日本と戦争状態にあった中国では、原爆は、「解放」を早めてくれたもの、もしくは対日戦争を早期に終結させてくれたものと受け止められています。このような状況を踏まえると、原爆文学と東アジアを結びつけることにはなんの有効性もないように感じられるかもしれません。しかしながら、広島・長崎における原爆被害者の約1割が朝鮮人であったという事実や、原爆被害者には植民地台湾や中国大陸をはじめとするさまざまな地域の出身者が含まれていたという事実に接すると、原爆問題の領域は広島・長崎あるいは日本だけにとどまらなくなるでしょう。原爆は広く東アジアとも関わる問題なのです。上記の事実は、日本社会に原爆問題についての認識の再考を迫るとともに、東アジアという観点に立つことの必要性を提起しています。「原爆問題と東アジア」という枠組を設定すると、そこから多くの有意義な問いが生まれてくるのです。

たとえば、原爆問題を東アジアとつないで考えると、「なぜ広島・長崎に多くの朝鮮人がいたのか」という問いが生じてきます。この問いは、広島・長崎の原爆問題を反省的に再考しようとするとき、さらには1945年8月の敗戦以前に日本が東アジアと結んでいた関係のあり方を反省的に再検討しようとするとき、有意義な観点を提示してくれます。日本社会は原爆を「三たび繰り返されてはならない悲惨な出来事」と受け止めてきていますが、上述の問いからさらに踏み込んで、「そもそもなぜ広島・長崎に原爆が投下されたのか」という問いまでを包括していくと、そこからは、原爆問題を東アジアの観点から考察することの意義や、原爆問題を媒介としてナショナリズムを克服する可能性が、見えてくると思います。

原爆問題を東アジアとつないで考えることは、ワークショップの表題にある「原爆文学」を再検討するとき、とくに有効です。「原爆文学と東アジア」という枠組からは、「日本の原爆文学は朝鮮人被爆者をどのように表象してきたか」といった問いを導きだすことができますし、そこから日本の原爆文学研究や原爆文学史を再点検する契機も生まれてきます。一方、「原爆文学と東アジア」という枠組は、日本とちがって韓国や台湾には原爆文学といえるものがほとんど存在しないという状況をも浮き彫りにします。このような非対称性は、

原爆文学を東アジアの観点から再検討することの有効性に疑問符を付すことになるといえなくもないかもしれませんが、しかし、より積極的に考えるなら、このような非対称性にこそ重要な意味があるともいえます。韓国や台湾の場合、原爆被害者の存在が広く知られるようになったのはやっと最近になってからのことですが、そのような状況に着目して韓国社会や台湾社会を考察することも可能でしょう。さらに、東アジアのなかでも北朝鮮の原爆被害者や原爆文学についてはほとんどなにも知られていないことを考えると、この作業は東アジア内部の非均質性や断絶を省察する契機にもなりうると思います。

今回のワークショップでは、以上のような問題意識に基づいて、「東アジアから原爆文学を読みなおす」という主題を掲げたうえで、この主題を二つのセッションに分けて考えることにいたしました。まず、セッション1では、日本の原爆文学研究の現状と課題を東アジアの観点から再検討する報告、また日本の原爆文学のなかの朝鮮人被爆者と在韓被爆者の表象を考察する報告を聞いてから、韓国と台湾の研究者がそれぞれコメントするかたちをとります。このセッションは、これまでの原爆文学研究の成果を踏まえううえで、日本の原爆文学を東アジアの観点から読みなおす試みであるといえるでしょう。

つづくセッション2では、作品の数は少ないもののたしかに存在している韓国の原爆文学についての報告を聞いたうえで、日本と韓国の研究者がコメントするかたちをとります。日本の原爆文学と韓国の原爆文学の違いなどを手がかりとして議論を広げていくことができるのではないかと考えています。セッション2の日本側のコメントでは、沖縄からの観点も導入されて、より多様な見方が提示されることと思います。そして、最後の総合討論では、二つのセッションの報告とコメントを踏まえながら、意見交換を行いたいと思います。

すくなくとも韓国では、「東アジアから原爆文学を読みなおす」という主題を掲げたワークショップは、はじめてであろうと思います。はじめての試みなので、不十分な部分も出てくると思いますが、各セッションの報告・コメントと討論、そして総合討論が、原爆文学研究の外延を拡大してくれるとともに、ナショナリズムを止揚して東アジアにおける新たな連帯を模索する動きへとつながっていくことを期待しています。